

言葉の流れつくところ

旭川北高等学校 三年 金内 希実

念願の文芸部は入学式の時点で三年後の廃部が決定していた。そのうえ翌年からは部員募集も停止するという話だった。入学初日から大きすぎるショックに襲われたと同時に、私は幸運だとも思った。もし私の歳が一つでも下だったら入部すら叶わなかったのだから。

そもそもなぜ廃部になるのか考えてみた。実は部活が廃部になる経験は二回目で、中学の頃に入部していた軟式テニス部の廃部が決まっていた。だが、それとこれはなんだか原因が違うような気がする。どちらも原因は単純に部員不足なのだろうとは思いますが、中学の頃は小学校の頃やっていたものを引き続きやる人が多かったからテニス部員は少なかつたのだろう。しかし高校からは真新しいものに挑戦する人もかなり多いと感じる。ならば文芸部はどうして部員が少ないのか。考えに考えて、ふと思った。もし誰かに何かを伝えようとするとき、あなたならどう伝えるだろうか。大抵の人は口頭で直接伝えたり、あるいはジェスチャーや図などを用いてより具体的に伝えようとするだろう。しかし、突然紙とペンを持ち出して、ガリガリと文章を書き始める人は中々いないと思う。それほど人々の認識の中で、文芸活動と日常の間には距離があるのだ。だから話すこと、絵を描くこと、演じることの

面白さには気付きやすいのに、文芸の面白さには気付く人は少ないのではないか。それが文芸部の人数不足に繋がっているような気がする。なんでもつたない！ 文字で構築する自由な喜びはもつと多くの人を魅了してもおかしくないのに。と、こんなに語っているが、私だって初めから文芸創作の楽しさを知っていたわけではない。あの本と出会った、という明らかなきっかけがある。

私が初めて文芸部という存在を知ったのは小学四年生の時だ。偶然、図書室にあったはやみねかおる氏の『そして五人がいなくなる』という本が目に入った。この主人公の岩崎亜衣ちゃんがまさに文芸部員だったのである。文芸部には部誌というものが存在し、大会用に作品を作ることもそれで初めて知った。亜衣ちゃんは締切間近になると、臉上に湿布薬を塗ってエナジードリンクを一気に飲みし死に物狂いでワープロに文字を打ち込む。そして朝も近くなつた頃、やつと作品を完成させた彼女は燃え尽きていた。普通、そんな大変そうな部活動は嫌だと思われるが、私にはその姿が面白くも輝いて見えた。当時、自分の世界を表現することに幼いながら楽しさを感じていた私は友達と遊び半分で漫画を描いていた。しかし当然自身の画力には限界がある。それに私が注目してほしいのは絵の上手さではなく物語自体だ。ジレンマを抱えていた頃、私にこの転機が訪れた。そうか、いつも読んでばかりだが、文字を綴って表現する手段がある

じゃないか！ と目から鱗だった。私は幼いながら文芸部に憧れを持ち、原稿用紙を大量に買って見様見真似でそこに物語を書き始めた。そこからこの世界の虜になったのである。高校に文芸部があると知ったときは早く高校生になりたいと思つたし、本当に文芸部員として活動できるようになつてからはずっと夢のようだった。

たつた一冊の本が私をこんなところにまで連れてきてくれたという奇跡。文芸の力は想像以上に強力である。たとえ廃部という終わりが見えていても、そんなことは関係ない。作品の中で言葉は紡がれ続けていくし、その足跡として残された文字を追うたびに読者へ強い影響を与え続ける。文芸創作として綴られた言葉たちは、真正銘筆者の心から生み出されたものだ。それはその指先を通り、媒体越しに読者の心へ到達する。言葉の流れつくところは読み手の心の中なのだ。流れ着いてしまえば、もうその言葉が消えることはない。読み手の中で作品は永遠となるのだ。自身が作り上げたものが残り続けるこの喜びを、あなたにも味わって欲しいものだ。

私には幸運なことにはきつかけが訪れたから、今文芸部として活動している。同じように、何かしらのきつかけがあり違う世界の虜になつた人が大勢いる。この世は趣味の宝の山だ。大勢を魅了するスポーツや音楽、美術などがあちこちで強い光を放っている。ただ、文芸創作が宝の中でも希少な石になつている。

それが気に食わないのだ。文芸にはまだまだ  
気付かれていない輝きがある。私が気付いて  
いない光もあるかもしれない。その楽しさに  
気付く人が増えるよう、私たち文芸部員が石  
を磨いていく必要があるのだ。そしてそれが  
次の世代が文芸創作に目覚めるきっかけとな  
る。少しずつでいいから輪を広げていくこと。  
そうしていつかその魅力がより多くの人に気  
付かれることを願うばかりである。